親イメージと青年期における親への愛着の関連

○松尾 多加志¹・稲田 尚史²(九州産業大学大学院¹・九州産業大学²)

キーワード: 親イメージ, 親への愛着, 青年期

The relationship between a parental images and a attachment to parents in young adulthood

Takashi Matsuo¹ and Naofumi Inada²(Graduate School of Kyushu Sangyo Univ.¹, Kyushu Sangyo Univ.²)

Key Words: parental images, attachment to parents, young adulthood

目 的

Bowlby(1969 黒田他訳 1991)は、愛着を養育者と乳児との間の情緒的な絆であるとし、青年期においても親は安全基地として重要な役割を果たしているとして述べている。青年期における親への愛着の形成要因として過去の養育態度が指摘されているが、松尾(2017)での回想法を用いた研究結果では、過去の養育態度のみでは親への愛着の形成について十分に説明できているとは言い難かった。そこで本研究では、現在の親子の関係性に着目し、子が自身の親に対して抱いているイメージ(親イメージ)が親への愛着にどのように関連しているのか検討することを目的とした。

方 法

【調査対象者】

2018年9月～10月に質問紙による調査を実施した。大学生187名(男性104名:平均年齢20.72, 女性83名:平均年齢20.24)を分析対象とした。

【質問紙の構成】

- (1)フェイスシート:年齢, 性別, 学年, 学科。
- (2)親への愛着尺度(丹波, 2005):「愛着不安」, 「愛着回避」の2因子。計16項目(5件法)。
- (3)親イメージ尺度:本研究のために作成した親イメージを測定するための尺度。既存の対人イメージ尺度を構成する118項目をKJ法に準じた方法で分類・精査し, 尺度項目の抽出を行った。「受容性」, 「明朗性」, 「誠実性」, 「主張性」の4因子。計27項目(7件法)。

結 果

親イメージの類型を見るためにクラスタ分析を行った。分析の結果, 「(親イメージ)平均型」, 「受容・見守り型」, 「不干渉・無口型」, 「無関心・不誠実型」, 「受容・指導型」, 「非受容・干渉型」の6つのクラスタに整理された。親イメージの6つのクラスタと親への愛着の関連を検討するため, 独立変数を親イメージの6クラスタ, 親への愛着尺度の下位因子で一元配置分散分析を行った。分析の結果, 愛着回避($F(5, 181) = 9.09, p < .001$), 愛着不安($F(5, 181) = 8.17, p < .001$)の主効果が有意であった。主効果が有意であったため, 多重比較(HSD法)を行ったところ, 「受容・見守り型」, 「受容・指導型」は親への愛着の「愛着不安」, 「愛着回避」が共に他のクラスタより有意に低い値を示した。「不干渉・無口型」, 「非受容・干渉型」, 「無関心・不誠実型」は「受容・見守り型」, 「受容・指導型」より「愛着不安」, 「愛着回避」が有意に高い値を示していた。親イメージが親への愛着に与える影響について検討するため, 重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。まず, 親イメージ尺度の各下位因子を説明変数とし, 愛着不安を目的変数とする重回帰分析を行った。分析の結果, 調整済み重決定

係数は有意であり($Adj. R^2 = .18, p < .001$), 標準回帰係数は, 受容性($\beta = -.27, p < .001$)で有意な負の係数, 誠実性($\beta = -.24, p < .01$)で有意な負の係数が認められた。次に, 親イメージの各下位因子を説明変数とし, 愛着回避を目的変数とする重回帰分析を行った。分析の結果, 調整済み重決定係数は有意であり($Adj. R^2 = .30, p < .001$), 標準回帰係数は受容性($\beta = -.47, p < .001$)が有意な負の係数, 主張性($\beta = -.19, p < .01$)が有意な負の係数が認められた。

考 察

親イメージの6クラスタと親への愛着の関連について検討した結果, 「受容・見守り型」, 「受容・指導型」は親への愛着の「愛着不安」, 「愛着回避」が低く, 自分の親に温かく子どもを見守るというイメージを持っている人, 温かく子どもを受け入れ, 必要に応じて子どもに対して指導的に関わるといったイメージを持つ人は親への愛着が安定していると考えられる。

また, 「不干渉・無口型」, 「非受容・干渉型」, 「無関心・不誠実型」は「受容・見守り型」, 「受容・指導型」より「愛着不安」, 「愛着回避」が有意に高く, 自身の親を非受容的であると捉えている人, 子に関心を示さず, 関わりを持とうとしないと捉えている人は愛着が不安定であると考えられる。

親イメージが青年期における親への愛着に与える影響について検討した結果, 親イメージの「受容性」は, 親への愛着の「愛着不安」, 「愛着回避」に負の影響を与えており, 自身の親のことを受容的であると捉えることが青年期における安定した親への愛着の形成に影響していると考えられる。親イメージ尺度の「主張性」は親への愛着尺度の「愛着回避」に負の影響を与えていたが, 標準偏回帰係数は非常に低い値を示し, 幼少期の養育態度の認知や親への愛着に与える影響は少ないことが明らかとなった。

親イメージの「明朗性」, 「誠実性」については親への愛着に与える影響は認められず, 子が自身の親を性格的に明るいと捉えているかどうか, 子が自身の親を子どもや他者に対して誠実であると捉えているかどうかは, 青年期における親への愛着の形成に直接的な影響は与えていないと考えられる。本研究の結果, 自身の親を受容的であると捉えているかどうか, 青年期における親への愛着の形成に影響していることが明らかとなり, 青年期においても親が大きな役割を果たしているとした丹羽(2005)の知見を支持していると考えられる。

大島(2009)は他者との関わりを通して親イメージが改善されていくことを明らかにしており, 親イメージの改善が安定した愛着の形成に影響することが考えられ, 親イメージの形成についても今後検討していく必要があるだろう。